

1 はじめに～本基本構想の位置付け～

清水港周辺に、港町・清水の都市再生につながる、新たな「海洋文化拠点施設」を計画、整備していくため、その基本的な考え方を示すものとして、基本構想を策定

2 海洋文化拠点施設の整備の背景

■清水港周辺を取り巻く状況
 《課題》「産業構造変化による中心市街地の活力低下」「津波災害への懸念」などの課題
 《特色》港町として発展し、海洋に関する産業、観光、学術、等の資源が蓄積
 《契機》「客船・観光等の拡大」「海洋への社会的な関心の高まり」などの契機

■目指す都市ビジョン「国際海洋文化都市・清水」
 これまで清水の成長・発展を支えた港湾産業都市の礎の上に、新たに、観光サービス産業や海洋新産業を育てながら、国内外から人々が訪れ、交流する仕組みをつくっていく

- 「国際海洋文化都市」実現に向けた3つの取り組みの柱**
- ①海洋人材の育成
 - ②海洋産業・ビジネスの振興
 - ③海を活かしたにぎわいの創出

■日の出地区における海洋文化拠点の創出
 日の出地区において、国際クルーズ拠点などの開発に合わせ、海洋に関連する様々な活動・機能を呼び込んだり、一体的な空間づくりを集中的に進め「海洋文化拠点」としていく。

■新たな「海洋文化拠点施設」の必要性
 「海洋文化拠点施設」の具体的な機能
 ・清水港周辺が誇るべき「駿河湾」や、海洋関連学術・研究機関の集積を活かした施設
 ・「海洋」を通じて人々が集まることができる施設
 →「**海洋・地球に関する総合ミュージアム**」を目指す

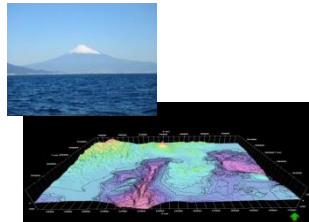
「海洋文化拠点施設」の実現により期待する「地域への効果」

- ①「海洋人材育成」、「海洋産業振興」「海を活かした賑わいづくり」の取り組みを推進する効果
- ②日の出地区の魅力をも高める効果
- ③施設整備・運営による雇用の創出、経済波及効果

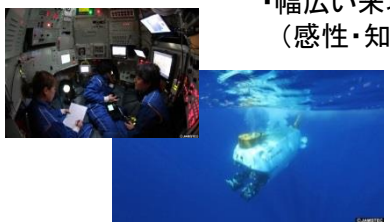
3 海洋文化拠点施設の基本的な方針について

■「海洋・地球に関する総合ミュージアム」のテーマ

- ①海洋の魅力が凝縮された「駿河湾」の発信
 ・-2,500mの深さの「駿河湾」から、3,000m級の富士山や南アルプスまで高低差5,000m以上の一体の地形・環境を捉えた発信
- ②海洋・地球のフロンティアに触れ、海への関わり、意識を高めることができる場
 ・国内外の研究機関と連携を図り、専門的な海洋調査・研究をわかりやすく展示・PR
 ・幅広い来場者が、海と関わるリテラシー（感性・知識・考え方・行動等）を学べる



駿河湾の解明



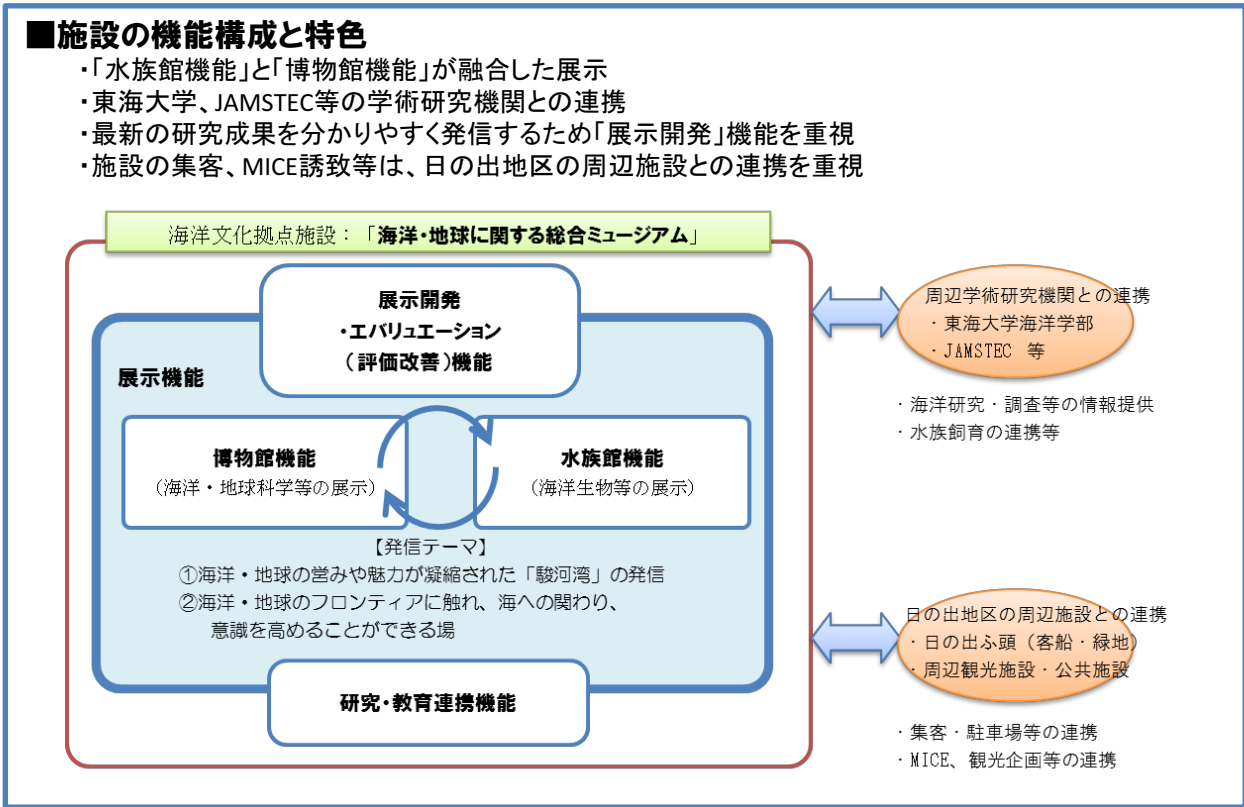
海洋研究の発信



海洋環境教育

■主なターゲットの想定
 立地・内容の特性から、以下のような、多様な利用を想定

- ①近隣圏域の住民
休日等に身近な観光地で、家族等と文化的な余暇を過ごす
- ②地域の子供たち
学校教育との連携により、課外授業等の機会で見学・港に関心を持って訪れる
- ③海外・県外等からのインバウンド旅行者(客船、等)
富士山・駿河湾や地元の魅力、非日常の特別な体験への期待を持った訪問
- ④コア層(海洋専門家、海洋ファン)
本物のサイエンスに触れ、同じ関心の人・専門家等とのコミュニケーションを期待した訪問



■施設の規模・立地等の想定

(1)想定される施設規模
数千㎡から**10,000㎡前後**を想定。今後、必要な機能、事業性などを総合的に考慮し精査。

(2)立地選定の考え方
以下の点から、「日の出ふ頭背後」のエリアが最適。

- ①敷地規模 →まとまった規模で、比較的低未利用の土地がある
- ②海との近接性 →客船ふ頭と近く、施設と船舶・海の連携が可能
- ③観光集客 →既存の商業施設・緑地等からふ頭への動線上に位置

4 「海洋文化拠点施設」の実現に向けた進め方

■事業手法の考え方

- ・官民連携事業手法(PPP)の中から、今後、事業概要等を詰めながら、最適な方法を検討。
- ・「入館料等収入による自立的な事業継続性」、「海洋研究・教育との連携等の公益性の確保」等を考慮し、官民双方の負担を想定。

■今後の進め方
 平成29年度以降、本基本構想に示したコンセプト、導入機能および計画条件を踏まえ、内容をより具体化し、官民連携手法を中心に検討し、事業方式の構築を目指す。